〈国内活動の報告〉
青少年国際交流事業事後活動推進大会
日本青年国際交流機構全国大会
青少年国際交流全国フォーラム

◆青少年国際交流事業事後活動推進大会
日本青年国際交流機構第29回全国大会
第20回青少年国際交流全国フォーラム
三重大会実施報告 …… 33
◆全国大会実施状況 …… 66

大会要綱

青少年国際交流事業事後活動推進大会
日本青年国際交流機構第29回全国大会
第20回青少年国際交流全国フォーラム
三重大会

1. 目　的：　内閣府、地方公共団体等の行う青少年国際交流事業の既参加青年が集まり、地域における事後活動の推進状況を報告するとともに、全国的な事後活動を更に充実させるための方策について積極的に意見交換を行い、既参加青年相互の交流と研さんを図り、今後の国際交流活動及び地域社会における諸活動の推進に貢献するとともに、国際交流活動を一般の方にも紹介していくことを目的とする。
2. 主　催：　内閣府
日本青年国際交流機構
一般財団法人 青少年国際交流推進センター
三重県青年国際交流機構
3. 後　援：　三重県
4. 主　管：　日本青年国際交流機構第29回全国大会三重大会実行委員会
5. 協　賛：　商船三井客船株式会社
6. 期　日：　平成25年8月17日（土）～18日（日）
7. 大会テーマ:　伊勢の杜で学ぶ常若の精神
8. 会　場：　一般財団法人　伊勢神宮崇敬会　神宮会館
〒516-0025　三重県伊勢市宇治中之切町152
TEL：0596-22-0001
9. 対象者：　内閣府、地方公共団体などが実施した青少年国際交流事業の既参加青年、青年国際交流事業に関心のある方
10. 参加費：

	種　別	大人（中学生以上）	子ども
A	全日参加（4人部屋）	14,500円	7,000円
B	全日参加（2人部屋）	16,000円	5,500円
C	全日参加（1人部屋）	18,000円	–
D	懇親会まで	20,000円	–
E	分科会まで	9,000円	2,000円

大会日程

大会1日目：8月17日（土）

時　間	内　容
12:30	受付
13:30	開会式
14:00	基調講演　『伊勢神宮の祭～常若の思想と日本文化～』
15:30	分科会 『文化継承』 A：外宮参拝とせんぐう館見学　～日本の歴史と食を考える～ B：触って知る、鈴鹿墨 ～にぎり墨体験～ 『青少年育成』 C：「高校生レストラン」の人材育成 ～地域から世界に目を向ける～ D：外国にルーツのある子供の学習支援　～三重県内の取組～ 『地域活性化』 E：英語語り部入門　～地域と世界をつなぐ～ F：まちおこしワークショップ ～伊勢河崎を歩く～ G：養殖真珠の世界 ～真珠アクセサリー製作体験～ H：伊勢茶～三重県のお茶を通して知る、自然と技術の継承～
19:30	懇親会

大会2日目：8月18日（日）

時　間	内　容
9:00	表彰式
9:45	各都道府県及び個人の事後活動紹介
10:45	閉会式
11:30	地域理解研修 １．伊勢神宮内宮正式参拝 ２．斎宮いつきのみや歴史体験館での平安の和菓子づくり、古代の遊び体験 ３．ドラマ高校生レストランのモデル、相可高校「まごの店」見学と昼食 ４．二見興玉神社参拝と夫婦岩見学

※34～64ページの内容は、三重県青年国際交流機構全国大会実行委員会が作成した報告書を基に作成しています。

開会式

1日目　8月17日（土）13:30 ～14:00　　神宮会館　大講堂

司会：川上　真由子

1. 開会
2. 主催あいさつ　内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室長　岩渕　豊
   日本青年国際交流機構会長　大河原　友子
   一般財団法人 青少年国際交流推進センター理事長　上村　知昭
   第29回全国大会三重大会実行委員長　川村　奈穂
3. 来賓あいさつ　三重県副知事　植田　敬
4. 来賓紹介
5. 祝電披露
6. 閉式

内閣府子ども若者・子育て施策
総合推進室長
岩渕 豊

日本青年国際交流機構会長
大河原　友子

一般財団法人
青少年国際交流推進センター
理事長　上村　知昭

第29回全国大会三重大会
実行委員長
川村　奈穂

三重県副知事
植田　敬

基調講演

1日目　8月17日（土）14:00 ～15:30　　神宮会館　大講堂

司会：川上　真由子

三重県伊勢で開催するに当たり、実行委員の「伊勢を知ってもらいたい。」「国際交流に携わる者として日本古来の宗教神道について私たちは十分に理解しているといい難いので知るべきではないか。」など様々な思いから今回神宮司庁広報室長・神宮禰宜の河合氏にお願いしました。そして、河合氏は淡々としていながらも優しく語りかけるようにお話してくださいました。

基調講演を聞いた参加者の皆様からは「神話から日本人としての勤労観、食の大切さ、精神論、とても深かった。」「“古くて新しい文化の継承”について、しっかり納得できて良かった。」などの意見を頂き、今後の国際交流をしていく中での日本人としてのアイデンティティにつながる部分を持ち帰ったのではないかと思います。

「伊勢神宮の祭～常若の思想と日本文化～」

講演者：河合真如（神宮司庁広報室長）

【基調講演内容要旨】

■日本の神話は化学で構成されている

伊勢の神宮では1,300年の伝統をもって、20年に一度、御宮を新しくして神様をお遷しする式年遷宮の年を迎えています。この式年遷宮の根底にあるものが「常若の思想」ですが、それについて論じる前に、伊勢の神宮とはどういうところなのか、どういう神様がお祀りしてあるのかというところから話を進めてまいります。

私は高校時代は化学を学んでおりました。化学の力で世の中を美しく豊かにできないだろうかと考えていたのです。しかし、当時、公害問題に直面しました。飲料水や母乳からも有害物質が検出されるという事態の中で、本当の化学とは何だろうかという疑問に突き当たりました。そうした中で、伊勢の神宮というところがあって、そこには二千年の歴史があり、自給自足の伝統を守り、美しい自然が残されていることを知りました。そうした中で神道とは何かということに興味を持ったわけです。そして、神道の古典と言われる古事記や日本書紀などに目を向けました。そこに書いてあることは、まさに化学的なことで、日本の神話は化学で構築されていることを、私はその時に初めて知りました。

最初に驚いたのが、因幡の白ウサギの伝承でした。ワニを騙して、丸裸にされて傷ついたウサギを大国主の神が救う時に、まずきれいな水で体を洗いなさい、その後、ガマの穂綿にくるまりなさいと教え

ます。まず、きれいな水で身を整えて、それからガマの穂綿、ガマの花粉のあるものを浴びなさいという意味になります。私はガマの穂の花粉にはフラボノイドという成分があることを知っておりましたので、なるほど、血管収縮作用のある花粉を浴びることによって、血止めをしたんだと分かりました。この神話が語られ始めた時代には、フラボノイドの成分分析はなされていなかったと思いますけれども、日本人は経験値的にそういった医学的知識を身に付けていたんだと驚いたわけです。

また、天上界では、我々の生活に必要なものすべてが執り行われていて、そうした暮らしがすべて地上に降ろされてきたと説かれています。これは実は荒唐無稽なことではなく、化学的にその成分を分析していくなら、そのとおりということになります。私がこの壇上で立っていることができるのも、骨があり、その骨をカルシウムが形成しているからです。内臓もカルシウム成分によって守られていますし、血が体中を巡るのも、鉄分が血液中に含まれているからです。それらは元素という名前で示されています。一人の人間には約30の生体元素があり、その集合体によって体は造られています。土も木もこの地上のあらゆるものが元素から形成されています。これら元素の故郷をたどっていくと、最終的には宇宙につながっていくわけです。宇宙にはたくさんの星があり、それらの星にも寿命があります。最終的には、爆発し、爆発の折に、元素が宇宙に拡散していく。そして、やがてそれらが融合、結合して様々な形態を生み出していくことになり、この地上にあるもの全てが天上界からもたらされたということは、化学的にも証明されるわけです。

■いかなる難問も解決する「祭り」

この神話を突き詰めていきますと、天岩戸開きの神話に行き着きます。この神話は、天上界でこの内宮の御祭神である天照大御神が三つのことをなさっていたというところから始まります。稲作、機織り、神聖な御殿における祭り。いわゆる衣食住の源というのは、高天原という天上界にあったと規定しています。ある日、その暮らしが破壊されます。荒ぶる神様が現れて、機織り、稲作、神聖な御殿を破壊してしまう。すると世の中は、真っ暗闇になったと書かれています。いわゆる衣食住という生活が破壊された時に、世の中は秩序と光を失って、真闇になってしまったのです。天照大御神様はその行いを畏れ、悲しまれ、深い洞窟の中に入って岩戸を閉じてしまう。まさに不幸の時代が始まったのです。しかし、秩序と光を失った中でも、神々は希望を捨てませんでした。皆が集まって、知恵と力を出し合います。そして、秩序の回復を願って、祝詞を奏上する、一生懸命祈りをこめる祭りというものがここで始められたのです。踊りの上手なアメノウズメノミコトという神様が、一心不乱に舞を舞います。また、力の強い神様、タヂカラオの神様はその力でもって岩戸を開けようとします。ニワトリも出てきます。ニワトリは夜明け頃になると高らかに鳴きます。光を、太陽を呼んでくれるトリという信仰があるぐらいです。あらゆるものが祈りを込めて、心を一つに力を合わせたときに、この岩戸は開くのです。祭りの力によって、人々の団結する心によって明けない闇はないのです。いかなる問題、難局であろうとも、心を一つに進むならば、必ずや成就するということを神話は示しているのです。

「古語拾遺」という書物の中には、この時に神々の「面（おも）」が白くなったと書かれています。「面」というのは顔のことです。神々の顔が白くなったとは、それまで憂い、沈んでいた神々の心と表情が、光と秩序が回復したことによって、ぱっと輝いたということです。これが「面白い」の語源だということも分かります。面白いとは、単にゲラゲラ笑うことではなく、輝かしい未来が開け、希望がそこに溢れた瞬間の表情であると昔の人々は考えていたのです。ですから、面白い世界を作っていくためには、皆がルールを守って、自分のできる範疇のことを一生懸命しながら、団結していくことに他ならないことを、古伝承は教えてくれているのです。

■真心こめて働く日本人の特性

ですから、神話を古い時代の荒唐無稽な話として切り捨ててしまい、その中にある化学性、倫理性を学ばないのは、もったいないことだと思います。日本人は、この天上界で神々がなさっていた行為そのものを「神業」と考えていました。ですから、我々が生きていく上でやっている仕事は全て神様につながる業なのだから、一生懸命手を抜かずにやっていこうという発想が生まれたわけです。

伊勢の神宮では、この神話、祭りに基づく文化、精神を大事にしてきました。年間のお祭りは約1500回ございます。毎日朝と夕に神々にお供え物をして、世の平和を祈る祭りを続けてきました。そして、その祭りに使う全ての道具類は、神宮で作りますし、お供えする「神饌（しんせん）」と言われるお米、野菜果物も、原則的に自給自足です。それはまさに、神様が我々に与えてくれた神業に他ならないからです。祖先が、神々がなさっていた神業を守り続けることによって、永遠の幸せを未来につなげていくのです。日本の神話は、神々と共に働くところに特性がございます。ですから、日本人に働くことへの強制感はなく、真心こめて、その業に勤しんでいくという発想があります。そういうデータを示すものとして、200年以上続いてきた老舗が世界に7,000あるそうです。そのうちの3,000は日本にある。これは、まじめに正直に、買い手のことを考えて、手を抜かず、その家業を守ってきた成果であろうと思います。そしてその原点には、やはり信仰があるのだと思います。

内宮の天照大御神は、正直の象徴としての信仰を集めてきました。その御神体は御鏡です。鏡というのは非常に正直な物です。その鏡に映る自分の姿は、外観も内面もそのとおりに映し出されます。泣いていれば泣いている顔が映りますし、怒っていれば怒った顔が映ります。ですから、鏡の前に立つように、大御神様の御宮に参拝して、目に見えぬ神に、その鏡に自分を投影するときに、本来自分が気付かなかったものや、自分が正すべき姿、心というものが投影されていくのではないのか。信仰とは神の前に自分をさらすことによって、自分の過ちややるべき事に気付き、それに向かうところにあるのではないか。そういう信仰を持つ、正直を尊ぶ民族にとって、製品を売ることは、自分の心を売ることに他ならないわけですから、手を抜いたり、むやみに値段を上げようとしたりしなかったがゆえに、信用を勝ち取って歴史を刻んできたのだと思います。

■命の根である「稲」

伊勢の神宮では、1500回を数える祭りが行われていると申しましたが、そのほとんどは稲作に関する祭りです。衣食足りて礼節を知ると言いますけれども、食べ物がなくなると、不幸なことが起こってしまいます。五穀の豊穣、豊作を祈る祭りを続けてきた神宮も、その部分を最も尊んできました。神様が我々に与えてくれた稲穂を作り続けていくことが、世の中を継続させて命を守ることに他ならないと信じてきたからです。稲は「命の根」という言葉が短くなったものであるとさえ言われてきました。まさに命を守り伝えていくものが、命の根である稲なのです。この稲は、様々な栄養素を含み、山のミネラルによって作られていますので、山の水がある以上、土地は永遠に砂漠化しません。稲作をするためには水が必要です。その水源は、山、森ですから、森林が保護され、育成される。すると、山の水がミネラルを含んで田畑を潤し、海のミネラルいっぱいの所では豊かな漁場ができ、貴重なタンパク源をとることができる。そしてその海の水は、太陽の光を浴びて蒸発して雲となり、雨となってまた山を潤していく。永遠の化学です。この季節の循環の中で、春に種を撒いて、秋にその稔りに感謝する祭りを続けていくならば、環境と自然が保全され、永遠に命が育まれていくのです。

■コメをエネルギーとする社会貢献

昔の人はこの米の周期を「とし」と言いました。稲のことを古語で「とし」と言った時代がありました。それは一年二年の「年」です。今は、一年365日5時間48分46秒という単位で示されていますが、もともとは稲作の周期です。田植えから田植え、刈り入れから刈り入れまでの一年間が命を育む「年」

であったのです。

日本の文化にも米文化は大きくかかわっています。米を作るためには念じなければいけません。雨があるように、日照りがないように念じ続ける。そこに「禾編（のぎへん）」が付くと「稔」という字になります。「禾編」というのはまさに、お米、稲が豊かに実る姿を表しています。ですから「秋」というのは、稲が赤々と炎のように色づくということで、その稔りは神々の恵み、自然の恵みですから、稲穂の「穂」という字は「禾編」に「恵」と書くのです。

そして、米ができることは大いなる喜びでした。「悦に入る」という字を思い出してください。それに禾編が付くと、米ができる悦びと共に「力」をつけてくれるものでしたから、「税」と呼んできました。米を食べることにより力をつけ、その力を集合していくところに、国を動かす力としての「税」、税金の「税」というものが誕生したのです。もともとは米をエネルギーに、様々な社会貢献がなされており、それが今はお米からお金に変わりましたけれども、その心はまさに神様と共にそれをいただいて、その力を広く社会に使っていくという意味があったのです。ですから、今の世の中も、皆が喜んで税金を納められるような良い国になればよいのです。そうすればとんでもない脱税もなくなって、さらに良い国になっていくはずです。この米の力を集めることによって、町々が、国々が栄えてきたのです。

ですから、昔の町の持つエネルギーは、米の取れ高で示されてきました。戦国武将の領地については、十万石とか百万石とか言われますけれど、百万石というのは、百万人の人が一年間食べていくことができる米がとれる、国を動かすエネルギーを持っているということです。ですから、大名たちも、一万より二万、二万より五万というように、一生懸命働いてきたのです。日々の命を未来につなげていくという神業が、稲作を中心として祭り文化を形成し、今日に至っているのです。

■なぜ式年遷宮が行われてきたのか

伊勢の神宮では米を作り、野菜果物を作り、塩を作り、日々それを神々にお供えする祭りを続けることによって、過去の物を今に伝え、そしてそれを未来に伝えています。常に若々しく瑞々しいことをなしていくということは、一度すればいいのではなく、連鎖の中で初めて意味を持つものだということを、伊勢の祭りは示しています。

この日々の連鎖の中で、伊勢の神宮では、10月に神嘗祭という大きなお祭りをします。これはその年に実った初穂、新米を感謝の心で神様に捧げ、さらなる永遠を祈る祭りです。神様から与えられたお米が今年もこんなに稔りましたと感謝を込めて、お供えをし、未来へ伝えていこうという覚悟とともに、神々にそれを御誓い申し上げます。このお祭りの時には、祭器具類というお祭り道具類が一新されます。しかし、御社殿は新しくなりません。ですから、その神嘗祭の拡大版として式年遷宮が位置づけられています。式年とは、定められた年という意味です。例えば、小学校の卒業式は六年、成人式は二十年というように定めの年の中で物事が行われていくことを指します。この式年を伊勢の神宮では二十年と定めました。式年遷宮は、二十年に一度、御宮を新しくして、神様をお遷しする究極の感謝の祭りです。伊勢の神宮の歴史は二千年、式年遷宮の歴史は千三百年です。式年という二十年に一度という意味で制度化されてからは、今回で62回、約千三百年になります。なぜこれが行われたかのか定説はありませんが、私はこう推定しております。千三百年前、天武天皇の御代、天皇がこれを御発案され、次の皇后であられた持統天皇の御代に、第一回の式年遷宮が挙行されました。この時代、中国大陸の方から様々な文物が導入され、既に法隆寺を建てる文化、礎石を築き、瓦を載せる永久的な建築技術が導入されていました。しかしながら、あえて古い形態を持つ伊勢の神宮を、なぜ作り替えながら維持していこうと思われたのか。やはり日本の国の根幹、命にかかわるものという意識が天皇の中にあられたのだと思います。伊勢の神宮の社殿の原型は、お米などを保管していた蔵です。命の根を保存していくための蔵です。今日も蒸し暑うございますが、この気候の中で食べ物を保存するためには、床を上げて風通しを良くし、動物たちが来て、中の物をあさらないように、柱で高くしておく。水害にもその構造は耐えることができます。横板壁で屋根を載せることによって、雨が降ってきたら木が膨張して中に雨風を入れません。乾燥してきたら、含んでいた水分を放出することで、天然のエアコンディショナーの働きをしていたのです。米を中心とする、瑞穂の国の美風が生んだ建物は、まさに機能と美に満ち溢れたものであり、神様を祀るにふさわしい御殿ともなりました。まさに天照大御神の神業を示す建物であり、信仰とともに機能を追求してきた歴史があるのです。そうしたものを残すことによって、国のアイデンティティ、精神文化を伝えようとされたのではないかと思います。20年に一度、建物を遷し替えるということは、非合理的に見えるかもしれませんが、この神事が続いたことによって、古い形態が、精神と規律が、今に若々しく瑞々しく伝わっているのです。

■繰り返しの美学

パルテノン神殿は、かつては神を祀っていましたが、今では神は失われています。エジプトのピラミッドも、巨大で神秘的な建築ですが、なぜ造られたかということさえ、分かっていません。本当の意味での迷宮になってしまっています。永遠を象徴する岩石でできた社殿が風化し、廃墟となっていく中で、伊勢の神宮は草と木でできています。どちらに耐久性があるかは言うまでもありません。伊勢の神宮は、祭りを繰り返すことによって、永遠性を保ち、常に若々しい姿を見せているわけです。繰り返すことによって、永遠を確立する。私はこれを「繰り返しの美学」と言いますが、永遠とは直線的に何かを成し遂げるのではなく、円のように繰り返していくことによって、強靭な魂と技術とともに伝えられていくのです。神宮の山々が美しいのも、草木が永遠にそこで命を保っているからではありません。繰り返し、繰り返し、連鎖することによって保たれているのです。一度行って、一度作ったら終わりではなく、それを作り続けていく精神を老化させないこと、これこそが「常若の思想」なのです。

式年遷宮も、先人達が日々の感謝を忘れず年々の祭りを続け、式年に一度、神を意識し真心をこめて行ってきたことによって、過去が今に、そして未来へつながっているのです。本当の幸せとは何かと考えるのならば、永遠の今の中にいる自分をしっかりと心の鏡に投影して、どう生きていくか、何を正していくかということを決めれば、天の岩戸開きの再現が行われ、世の中は永遠に美しく豊かに、面白くなっていくものなのです。

分科会一覧

番号	分類	名前	講師	説明
A	文化継承	外宮参拝とせんぐう館見学 ～日本の歴史と食を考える～	深田　一郎氏 せんぐう館学芸員	式年遷宮とは伊勢神宮で20年に一度社殿をすべて建て替える行事で1300年前から行われている。せんぐう館訪問や下宮参拝を通して、遷宮の歴史を学び日本人の食を考える。
B	文化継承	触って知る、鈴鹿墨 ～にぎり墨体験～	伊藤　亀堂氏 伝統工芸士	延暦年間から受け継がれる、経済産業大臣指定伝統的工芸品の鈴鹿墨。いまや国内で唯一となった鈴鹿墨の伝統工芸士が、その技術を次の世代に伝えるとともに、現代文化に沿った新しい墨のパフォーマンスに取り組んでいる。伝統工芸士から文化の継承と現在の活動を紹介いただきながら墨の製作工程の一つであるにぎり墨を体験する。
C	青少年育成	「高校生レストラン」の人材育成 ～地域から世界に目を向ける～	村林　新吾氏 三重県立相可高校 食物調理科教諭 同校調理クラブ顧問	即戦力となる料理人を育てることを目指している三重県立高校食物調理科では、海外のコンクールにも生徒を派遣したり、他国の高校生との交流もしている。調理クラブでレストラン「まごの店」を運営するほか、地元企業との連携も行うなど、地域に根ざして世界にも目を向けた人材育成について考える。
D	青少年育成	外国にルーツのある子供の学習支援 ～三重県内の取組～	江成　幸氏 三重大学人文学部 準教授	三重県は全国的にみても外国人比率が高く、家族と一緒に来日する子供が増加している。言葉や文化の違いを超えて、日本の教育に馴染めるように、県内各地で支援が行われている。そうした支援活動の事例を紹介し、ワークショップ形式で参加者とともにより良い支援を考える。
E	地域活性化	英語語り部入門 ～地域と世界をつなぐ～	栗林　紀美氏 三重県立木本高校 定時制教諭 通訳案内士	熊野古道では世界遺産に登録されて以来、訪れる外国人の数が急速に増加している。文化背景の異なる国からの訪問者に、熊野の信仰、歴史や文化を伝える通訳案内士の活動を紹介する。ワークショップでミニガイドを体験してみよう。
F	地域活性化	まちおこしワークショップ ～伊勢河崎を歩く～	西城　利夫氏 NPO法人伊勢河崎 まちづくり衆理事	かつて「伊勢の台所」ともよばれ、参拝客をもてなす街として発達した勢田川沿いの河崎を舟参宮で散策したり、陸運が発達してその役割を終えた河崎商人館の蔵を見学したりしながら、この町を実例にして観光スポットをどのようにPRしていくのか？ワークショップを通して考えます。
G	地域活性化	養殖真珠の世界 ～真珠アクセサリー製作体験～	小西　蔀氏 伊勢パールセンター	伊勢志摩で産み出され世界へ羽ばたいた養殖真珠。真珠ができるまでの過程や現在とりまく環境などについて伊勢パールセンターを訪問し学び、変形真珠の個性をいかしたアートに触れる。淡水真珠を使ったアクセサリー作りを体験する。
H	地域活性化	伊勢茶 ～三重県のお茶を通して知る、自然と技術の継承～	松本　浩氏 (有)深緑茶房代表 取締役	(有)深緑茶房は松阪市飯南町で茶製造業を営み、優秀な農林水産者にのみ与えられる最高の賞、「天皇杯」を受賞したことでも知られる。おいしいお茶の淹れ方を体験しながら、高齢化、若者の農業離れ等、課題についていち早く取り組んだ様々な事例から学ぶ。

A：外宮参拝とせんぐう館見学
～日本の歴史と食を考える～

大会1日目　8月17日（土）15:30～17:30　場所　伊勢神宮外宮＆せんぐう館

担当：白木　邦貞

■せんぐう館案内：　学芸員　深田　一郎氏
■見学地：　伊勢神宮　外宮
　　住所　　三重県伊勢市豊川町126-1
　　電話番号　0596-22-6263
　　ＵＲＬ　　http://www.sengukan.jp
■参加人数　40名
■ねらい
　式年遷宮は、20年に一度社殿をすべて建て替えるという、1300年前から伊勢神宮で行われている歴史ある伝統行事です。せんぐう館訪問や外宮参拝を通して、遷宮の歴史を学び、日本人のルーツや文化について理解を深めます。
■内容
　式年遷宮の式年とは年を定めて定期的に行うという意味であり、遷宮とは神様の住居であるお宮を新しく立て直し、神様にお移りいただくということです。せんぐう館では、学芸員の深田氏より遷宮の意義や、そこに伝わる技術と精神の伝承について熱く語っていただきました。
　せんぐう館には実際に外宮のお宮と原寸大の社があります。参加者はその社を見た瞬間、あまりの大きさに驚き声を失っていました。その前で、深田氏より内宮と外宮の形式の違いを教えていただきました。参加者は、神宝や様々なお社の装飾について、深田氏に様々な質問を投げかけていました。深田氏はその一つ一つに、わかりやすく、丁寧にお答えくださいました。御案内後、参加者の方が深田氏のお話によって、「外宮への理解が深まった。」「外宮を見に行くのが楽しみです。」などとおっしゃっていました。とても有意義な時間を過ごしていただけたようです。
　また伊勢市観光協会の協力を得て、食を司る外宮の意義やお祭りについてご案内をいただきました。外宮は、内宮にいらっしゃる天照大御神のお食事を担当する豊受大御神をお祭りしているお宮で、日本人の主食であるお米に深い縁の神様です。1500年間一日も欠かすことなく行われている日別朝夕大御饌祭というお祭りについて説明を受けました。神宮では、自給自足を原則としており、火のおこし方や調理の仕方などもすべて1500年来続く古式にのっとった方式を取っているそうです。これらの事実は、非常に驚くべきことでした。伝統を伝統として形を変えずに受け継ぐことの難しさ尊さを感じ、また、日本人と米との関係の重要性を再認識することができました。

（記　白木　邦貞）

B：触って知る、鈴鹿墨～にぎり墨体験～

大会1日目　8月17日（土）15:30～17:00　場所　本館第一会議室

担当：古川　美春

■講師：伊藤　亀堂氏（伝統工芸士）

1964年（昭和39年）、鈴鹿市に生まれる。1984年（昭和59年）より父、亀吉に師事。1995年（平成7年）鈴鹿製墨協同組合専務理事就任。1998年（平成10年）、進誠堂墨舗代表となる。2000年（平成12年）に、業界初の8色墨を完成させ、また同年、通商産業大臣指定伝統工芸士に認定される。2001年（平成13年）には業界初の1分墨（超早おり墨）を発売。2002年（平成14年）鈴鹿市伝統工芸士会副会長就任、2003年（平成15年）社名を有限会社進誠堂とし、代表となる。2005年（平成17年）鈴鹿製墨協同組合代表理事就任、2007年（平成19年）、雅号　墨匠　伊藤亀堂となる。2008年（平成20年）に三重県知事賞、中部経済産業局長賞をそれぞれ受賞。現在も新商品の開発に積極的に取り組んでいる。

■参加人数　21名

■ねらい

経済産業大臣指定伝統的工芸品の鈴鹿墨は、延暦年間から現在まで受け継がれています。いまや国内で唯一となった鈴鹿墨の伝統工芸士伊藤氏は、その技術を次の世代に伝える活動を展開するとともに、現代文化に沿った新しい墨のパフォーマンスに取り組んでいます。伝統工芸士から文化の継承に関する話を聞いた後、現在の活動を紹介いただきながら墨の製作工程の一つであるにぎり墨を体験します。

■内容

まず、鈴鹿墨とその歴史について説明をいただきました。松を燃やしたときにできる煤（すす）を集め、牛、鹿、山羊からとれる膠（にかわ）を混ぜ、練った後に木枠に押し込み乾燥させて墨を作ります。この製法は鎌倉時代に確立され、現在まで受け継がれています。はじめは武家社会でのみ使われていた墨も、明治維新の後寺子屋の出現とともに一般大衆化され、広まっていきました。明治時代から昭和初期にかけてが一番のピークでしたが、戦後墨汁が出回るようになるにつれて需要が徐々に減少してきました。そんな中、鈴鹿墨は、昭和55年通商産業省が200年以上製法と原材料が変わらないものに対して認定する伝統工芸品に指定されました。当時100数名いた職人もオイルショックや墨汁などの打撃を受け6年前から進誠堂１軒のみとなりました。

次に、墨の利用の現状についてお話しいただきました。昨今は簡単に扱える墨汁が広く出回っており学校の習字の時間（現在は書写という名前で国語の時間に行われている）では限られた時間内で授業を行うため、墨をすることがほとんどできないそうです。その現状を踏まえ、伊藤氏が3年ほどかけて開発したものが、1分ですることができる早おり墨です。墨をする時間が短縮できるだけでなく、コストも抑えて扱いやすくしています。このような努力の甲斐があって、現在では鈴鹿市内の学校で使用されているそうです。その後伊藤氏は色墨の開発に取り組みました。黒にこだわることなく色を含ませることにより色のバリエーションが増えましたが、当初は業界からの反発が多かったそうです。しかし、書道家の武田双雲氏が気に入って使っていただいた影響で、徐々に浸透していったとのことです。このような新しい取組は、墨の文化を残していくためだと伊藤氏は考えています。現代の文化のニーズにあった商品を開発していくことで、身近なものとして使っていただくよう、日々研究されています。今後は食品とのコラボレーションも検討中とのことです。

続いて、にぎり墨の体験をしました。保温庫で温められた墨の塊を練って小さく分けたものを参加者の皆さんに一人ずつ握っていただきました。乾燥前のやわらかい墨は、すこし温かく、また弾力が感じられました。握った墨は持ち帰っていただき、家で乾燥して仕上げます。

最後に参加者の皆さんから数多くの質問がありました。パンフレットにはたくさんの種類の墨があるが、昔から伝えられたものなのか、新たに作るものなのか、との問いには、1200年続く配合表に基づき、2年サイクルで200種類ずつ作るとのことでした。また、書道の作品を見て墨汁と墨の違いはどのように分かるのか、という質問には、光り方やにじみ方を見て判断できるとのことでした。そして、息子の晴信氏にも一言伺ったところ、まだまだ始めたばかりで分からないところもあるが、祖父、父と同じ仕事をしたい、父に追いつきたいという気持ちでやっているとお話しいただきました。

（記　古川　美春）

C：「高校生レストラン」の人材育成
～地域から世界に目を向ける～

大会1日目　8月17日（土）15:30～17:30　場所　神宮会館講堂3階第一、二会議室

担当：小島　久美子、相松　久美子

■講師：村林　新吾氏
　三重県立相可高校食物調理科教諭
　同校調理クラブ顧問

村林　新吾氏

■参加人数　52名

■ねらい
　三重県立相可高校食物調理科では、即戦力となる料理人を育てることを目指しています。そのために、海外のコンクールに生徒を派遣したり、他国の高校生と料理を通して交流したりしています。
　調理クラブでは将来を見据えて、レストラン「まごの店」を運営するほか、地元企業との連携も行っています。話を聞くことで、地域連携、異文化交流による人材育成について考えます。

講演中の様子

■内容
　まず、村林先生より、自己紹介、相可高校、そしてまごの店の御紹介をしていただきました。先生はとても気さくな方で、お話もとてもわかりやすく一つ一つがとても興味深いものでした。まごの店の由来や辻調理師専門学校の教師としての修行時代、フィリピンでのボランティア活動の話など、様々な視点からお話いただきました。先生のお話は話題が豊富で、次々展開していく内容の一つ一つがとても魅力的で、あっというまの講演でした。会場は常に笑いがつきることなく、参加者の方の笑顔も印象的でした。村林先生の「仕事はやらされるものではなく自分からやり、学びとるものだ。」という言葉が心に響きました。その話をお聞きし、料理や教育、仕事に対する誇りや姿勢がすばらしいと感じました。そして、先生御自身がこの仕事が大好きで苦にならないというのが素敵で、先生の人柄に引き付けられ、周りの人や生徒さんも変わっていくのがわかりました。
　また講演中、村林先生にDVDを上映していただきました。その内容は、相可高校の生徒の皆さんが、高校生国際料理コンクールにて世界一を目指すという番組でした。プレッシャーを乗り越えて頑張る二人の高校生が奮闘する姿に心打たれました。自分自身も見ていて、これから色んなことに挑戦してみたいと素直に思える内容でした。
　参加者の中には、次の日の地域理解研修で実際に「まごの店」を訪れる予定の方もいました。分科会で先生のお話を聞いたことで、さらに地域理解研修への期待が高まったようでした。「実際にお伺いすることがとても楽しみです。」と言う参加者も多くいました。
　多くの話題で講演中は会場が盛り上がりました。残念ながら時間の都合上、質疑応答の時間はとれませんでした。しかし、参加者の方はとても満足した様子だったので、良かったと思います。村林先生にはお忙しいところ講演を引き受けていただき感謝しております。

（記　相松　久美子）

D：外国にルーツのある子供の学習支援
～三重県内の取組～

大会1日目　8月17日（土）15:30～17:30　場所　神宮会館　島路の間

担当：廣田　知加子

■講師：江成　幸氏
　三重大学人文学部準教授
　1990年、第2回「世界青年の船」事業に参加青年として乗船。その後、テキサス大学留学。第13回「世界青年の船」事業にはアドバイザーとして乗船。現在は三重大学人文学部にて社会学の教鞭をとる。
専門分野はアメリカ合衆国のメキシコ系移民、日本で暮らす日系南米人に対する支援。

■参加人数　30名

■ねらい
　三重県は全国的にみても外国人比率が高く、家族と一緒に来日する子供も年々増加しています。そのため、言葉や文化の違いを乗り越えて、日本の教育に馴染めるように、県内各地で様々な支援が行われています。そうした支援活動の事例を紹介し、ワークショップ形式で参加者と共に、子供の目線に立ったより良い支援について考えます。

■内容
　東海地域は製造業が盛んなため、外国人域（三重県は特に南米系住民が多い）の国際化が進んでいる地域が多く存在します。三重県各地で家族と来日の子供、日本で生まれ育った子供たち（外国にルーツのある子供）に対する支援が行われています。今回は、講師の江成先生より三重県各地の学習支援の状況ついて説明がありました。その中で、各地において支援の仕方が様々で、ボランティア、行政、教育機関が連携をとって行われている活動について、いろいろとお話をしていただきました。三重県ではポルトガル語での自動車運転免許学科試験を実施しているなど、興味深い話を聞くことができました。

　三重県での事例を発表いただいた後、A. 日本語・学習支援、B. 母国文を忘れないために、C. 行政–ボランティアの連携という三つのグループに分かれてワークショップを行いました。各グループの中で、自身の活動の体験より、外国にルーツのある子供の支援について相互理解と安心感が必要というような意見や、そのためにはどのような活動を私たちができるのかというような話合いを行いました。
　各グループでのワークショップの後は、お互いのグループで話し合った内容をシェアする時間を設けました。参加者の皆さんとの積極的な話合いの時間となり、充実した分科会となりました。

E：英語語り部入門～地域と世界をつなぐ～

大会1日目　8月17日（土）15:30～17:30　場所　神宮会館講堂3階　第三会議室

担当：川上　真由子

■講師：栗林　紀美氏

熊野市出身　1977年～1981年　東京YMCA英語教師

1982～1983年、シドニー大学大学院留学（ロータリー奨学生）。20数か国からの学生が住む寮で暮らし、その後、東南アジア5か国を2か月半かけて１人で旅する。様々な国で多くの人々と出会い、異なる習慣や文化を学ぶ。帰国後、高校英語教諭となり、2007年通訳案内士の資格を取得。教諭としての仕事の傍ら、熊野古道英語ガイドやボランティアガイドの育成にかかわり、地域活性化に取り組む。

栗林紀美先生

■参加人数　14名

■ねらい

熊野古道は世界遺産に登録されて以来、訪れる外国人の数が急速に増加しており、英語でガイドができる人材が求められています。文化背景の異なる国からの訪問客に、熊野の信仰、歴史や文化を伝える通訳案内士の活動を紹介する事により、地域発信の必要性、重要性について考えてもらうきっかけになるよう目指しました。また、ミニワークショップを通して英語で日本や文化を紹介するコツ、そしてその難しさや楽しさを知ってもらい、今後の活動にいかしてもらうことをねらいました。

ワークショップの様子

■内容

まず、栗林先生の自己紹介では国際交流や日本文化に興味を持つようになったきっかけ等を、写真を交えながらお話いただきました。30年前の留学や2か月にわたる東南アジア一人旅など、IYEO会員の経験や思いと共通する部分が多々あり、参加者の皆さんも興味深そうに聞いていました。20年前のインドネシアやマレーシアでの写真（先生ご自身のもの）を通して現在との違いも見ることができました。

その後、第一部は栗林先生が従事する「通訳案内士」についてのお話から始まりました。プロの通訳案内士とボランティアガイドの違いについて、また、ご自身の熊野古道ガイドの体験を通して、ガイドの醍醐味や心得等を語っていただきました。ポールマッカートニー等の有名人たちをガイドされた体験や、世界遺産登録の審査をするイコモス（ICOMOS/国際記念物遺跡会議）会長の通訳をされた体験、イギリス捕虜兵との和平交渉等の歴史的現場での通訳体験等を通して「英語」から人脈や視野が色々と広がったというお話がとても印象に残りました。

そして、伊勢から熊野までの熊野古道の写真を使って、伊勢から熊野までの古道の旅を皆さんに楽しんでいただきました。

第二部は、参加型の英語ガイドワークショップを行いました。まず「英語で日本を紹介」のお手本として栗林先生による熊野三山の英語ガイドデモンストレーションを聞かせていただきました。熊野比丘尼地獄絵図絵解きを英語バージョンで行っていただきましたが、絵解きを初めて聞くという参加者も多く、これを英語で聞けるなんて、と皆さん驚いていました。

その後、三つのグループに分かれ、英語ガイドになりきってご当地自慢を行いました。最初に各自で、自己紹介と自分の出身地を紹介する文面を書いていただき、その後グループで紹介、質問タイムとなりました。いきなり英語に切り替わるということで、少し緊張感もありましたが、ご当地自慢が始まると雰囲気も一気に和やかになり、各グループとても楽しそうな声が聞こえてきました。参加者の方の多くがパンフレットを持ってきていたり、内容を考えてきていたり、事前準備もしており、とても内容の濃いガイドシュミレーションとなっていました。全国各地から参加しており、日本の様々な地域の情報が英語で飛び交うとともに、それに対する質問も活発に出て、時間を忘れるほどの盛り上がりでした。ワークショップの最後には、各グループから推薦された代表3名が全体に向けてガイドプレゼンテーションを行い、ガイド内容に込められた地元への思いや、発表の工夫、各地方の豆知識等をシェアしました。

分科会全体を通して、参加者からは「ガイド体験がとても楽しかった」「栗林先生の案内を聞いて熊野古道に行きたくなった」「通訳案内士資格取得への意欲が湧いてきた」等の感想がありました。そのような皆さんの思いや、栗林先生から頂いたヒントを是非今後の事後活動の中でいかしていきたいと思います。

（記　川上　真由子）

全体発表の様子

発表する参加者

F：まちおこしワークショップ～伊勢河崎を歩く～

大会1日目　8月17日（土）15:30～17:30　場所　伊勢河崎

担当：石川　譲二

■講師：西城　利夫氏
　NPO法人伊勢河崎まちづくり衆理事

■参加人数　40名

■ねらい
　かつて「伊勢の台所」ともよばれていた伊勢河崎は、勢田川沿いにあります。参加者は、参拝客をもてなす街として発達したこの町を舟参宮で散策します。その後、陸運が発達してその役割を終えた河崎商人館の蔵を見学しながら、この町を実例にして、観光地のPR方法を考えます。

■内容
　バスで河崎商人館に向かいましたが、予想以上に参加者が多かったので、二つの班に分かれ、河崎商人館と舟参宮を交代で見学体験しました。
　往路のバスの中では、案内役の石川が、伊勢神宮への参詣客が今年1000万人を超え、東京ディズニーランドの年間来訪者（約1300万人）に近づくこと、また、江戸時代の参詣者が500万人（当時の人口が2500万人）であり、その胃袋を満たすため、全国から特に尾張や大阪地域から、食料を調達していた川の港で当時の問屋街が河崎であったということの説明がありました。
　バスを降り、２班は河崎商人館を訪問しました。江戸時代に創業された、酒問屋「小川酒店」を伊勢市が修復整備し、伊勢河崎の問屋のシンボルとして残した施設です。管理運営は、NPO法人伊勢河崎まちづくり衆が行っています。理事の西城利夫氏より少し伊勢のことについてお話をしていただき、館内を案内していただきました。「山田葉書」という日本最古の紙幣（現代風に言うと地域通貨）があり、当時の伊勢が一大観光地であったこと、また、「おみやげ」の発祥というのもうなずける話だと思いました。
　また、「小川酒店」は江戸時代の文学者、本居宣長の国文学の本などが残されており古事記の研究書がたくさん保存されていました。
　また、１階には大きめの茶室がありました。茶室というと、４畳半の大きさの部屋を想像しますが、当時の酒問屋ということもあり、お茶だけではなく、お酒なども提供するために、８畳ほどの茶室と、12畳ほどの客間があり、たくさんの参詣客や船頭さんでにぎわっていたという当時の様子が伺えました。明治以降、海上ルートから陸上ルートである鉄道やトラックやバスの出現とともに、船問屋としての機能が薄れてきたこの町も次第に住宅の開発が進み、1999年、約300年続いた小川酒店を壊してマンションの建設が持ち上がりました。それに対し、伊勢市とNPOが待ったをかけ、文化財として残していきたいということで、現在「河崎商人館」という名前で河崎のまちづくりの拠点となっています。その後、河崎商人館を出て、川の駅から、今度は当時の舟参宮を体験していただくために、20人乗りの和船「みずき」に乗船しました。伊勢への物資を運ぶと同時に、熱田神宮から伊勢神宮へお参りする際、三重県桑名市（三重県の北部の市で、桑名の焼き蛤で有名な町）に七里の渡しがあり、海上ルートで参宮をする舟参宮の終点でもあったそうです。明治時代の小川商店で作っていたサイダーの復刻版を飲んだり、舟参宮の終点である二軒茶屋でお餅と美味しい伊勢茶を頂いたりして、問屋街だった頃のにぎわいを想像することができました。

■ワークショップ
　復路のバスの中で二つの班が合流したので、芳賀を中心に皆さんに河崎の町を今後どのようにしていけば、観光地としてもっと人が呼べるか、意見交換をしました。
河崎商人館
・大学で観光学に携わっている先生や学生に来てもらい、産官学で河崎のまちをもっと観光拠点としてPRできるようにする。
・観光業者や飲食店だけでなく、地元の河崎の住人に貢献できるように楽市楽座やフリーマーケットなどを定期的に開催する。
舟参宮
・船頭さんの説明があったが、後ろのほうが聞こえなかったのでマイクの設備を備えたほうが良い。
・船頭さんが小唄を披露してくだされば、もっと良かった。
・舟からみるまちの景色に統一感がないので、例えば、柳や桜を川岸に植林するなどして、景観にも配慮をすると良い。
・月２回のみの定期船の便数をもっと増やすと同時にホームページやブログを充実させる。
　今後、三重県IYEOのメンバーでも、河崎まちづくりに協力してより多くの観光客を増やしたいという結論になりました。

（記　石川　謙二）

G：養殖真珠の世界～真珠アクセサリー製作体験～

大会1日目　8月17日（土）15:30～17:30　場所　伊勢パールセンター

担当：朝倉　夏歩、斎藤　珠恵、松本　香奈子

■講師：小西　蕋氏
(株)伊勢パールセンター
真珠の病院
小西バロックパールギャラリー
http://www.isepearlc.com

■参加人数　18名（スタッフ含む）

■ねらい
養殖真珠は、伊勢志摩で産み出され世界へ羽ばたきました。そのような真珠について詳しく知るため、伊勢パールセンターを訪問し、真珠ができるまでの過程や現在とりまく環境などについて学びました。また、淡水真珠を使ったアクセサリー作りを体験し、より理解を深めました。

■内容
バスで伊勢パールセンターへ向かう間、担当者が真珠についての基礎知識を簡単に説明しました。到着した参加者は、まず玄関のしめ縄に興味を示しました。「夏のこの時期になぜ？」伊勢地方には、一年中しめ縄を飾る風習があります。小西社長さん始め、スタッフの皆さんに迎えられて参加者は「養殖真珠の世界」に足を踏み入れました。早速、養殖の淡水真珠を使ってのアクセサリー製作体験にとりかかりました。真珠やビーズ、貝殻細工のペンダントトップなどでネックレスを作ることができるセットが用意されていました。参加者は、くじでそれぞれ異なるセットを手にしました。加工のプロであるパールセンターのスタッフの方々がアドバイスをしてくださりながら、製作体験は進んでいきました。布に真珠やビーズを好みで並べ、ネックレスの中心のデザインを決めてからワイヤーに通していきました。あちこちで楽しげな笑い声がしていましたが、集中してくると静かになる時間もありました。真珠に触れた参加者からは、「夢中になってしまう」「これは楽しいですね」といった声が聞かれました。

養殖に使われる道具やアコヤ貝の模型も自由に見ることができました。天然の真珠のほとんどは真円ではなく変形したものだそうですが、社長の小西さんは変形真珠（バロックパール）の個性をいかしたアート作品をつくり、ギャラリーに展示しています。アクセサリーを仕上げた参加者は、館内の展示を見てまわったり、小西さんに真珠についてあれこれ質問していました。

長年真珠の加工、販売、修理に携わってきた小西さんのお話では、現在は真珠を育む日本の海の環境が悪くなってきて、良い真珠を得ることが難しくなっているそうです。真珠の手入れで大切なのは、身につけた後、柔らかい布で拭いておくこと。そして意外だったのは「しまいこまないこと」。時々出して眺め空気に触れさせるのが良く、こうすることで真珠の美しさを保てるとのことでした。

完成したネックレスを手にパールセンターを後にした参加者からは、「とてもいい方々だった」「また来たい」といった感想をいただきました。

（記　松本　香奈子）

H：伊勢茶～三重県のお茶を通して知る、自然と技術の継承～

大会1日目　8月17日（土）15:30～17:30　場所　神宮会館　神路の間

担当：古川　敬

■講師：松本　浩氏
(有)深緑茶房代表取締役

(有)深緑茶房は、松阪市飯南町で180haの茶畑のうち30haを管理しています。
生産方法について一から見直し、茶畑の機械化、工場のオートメーション化を取り入れ若者が農業に従事しやすいような工夫、改善を行っています。
生産されるお茶は業務用と小売用があり、小売用は地元の販売店舗を中心に松阪市・津・伊勢方面で販売され、通信販売で全国発送も承っています。
また地域の活性化にも積極的に取り組み、お茶教室、学生向けの職業体験等、様々なイベントで消費者と交流する機会を設け、お茶文化の普及に尽力しています。

■参加人数　25名

■ねらい
(有)深緑茶房は松阪市飯南町で茶製造業を営んでおり、優秀な農林水産者にのみ与えられる最高の賞、「天皇杯」を受賞したことでも知られています。深緑茶房の茶製造への取組やこだわりについて学び、同時においしいお茶の淹れ方を体験して三重の茶文化への理解を深めます。

■内容
はじめに、講師を務めていただいた松本社長より、深緑茶房の立ち上げから現在の取組までの話を御紹介いただきました。元々三重県のお茶は、京都の宇治茶として消費されるのが主流だったのですが、ここ10年で三重県のお茶「伊勢茶」としてブランド化されました。そのような中、深緑茶房は、小売販売部門の経営を中心とした法人として平成11年3月に設立されました。本社には日本茶カフェが併設されており、県内外から多くの人が訪れます。平成22年には津駅前に小売店を、さらに、平成25年7月には名古屋駅前に日本茶カフェをオープンしました。松本社長は、「三重県の茶文化を活性化させていくには、世間の多くの皆様に知っていただくことが大事」という信念から、名古屋への出店を決められたそうです。将来的には東京への進出が目標で、今後も精力的に日本茶の普及を目指していく考えです。

日本茶体験では、5人ずつ5グループに分かれ、おいしいお茶の淹れ方を体験しました。重要なのは、温度と時間です。丁度よい温度に調整するため、「湯冷まし」という道具に湯を注ぎ、更に湯飲みに注いで温度を下げます。2回湯を移し変えることにより、湯が緑茶の甘みや旨みを引き出すのに最適な温度となります。また、一煎目のお茶を注ぐ際には、2回移し変えた湯を茶葉入りの急須に注ぎ入れ、蓋をして1分間置きます。急須から湯飲みに注ぐときは、全員分の湯飲みに少しずつ回し注ぎ、茶の味が凝縮された最後の一滴まで絞りきります。2煎目を注ぐ際には、茶葉が十分開いているので、一度湯冷ましに注いだ湯をそのまま急須に注ぎます。

参加者全員、松本社長のお話に耳を傾けながら、おいしい茶の淹れ方を実践し、本物の味を楽しんでいました。参加者からは、「こんなにまろやかで味わい深いお茶を飲んだのは初めて！」「ぜひ家で実践したい！」「湯が冷めてもおいしい！」などといった好意的なコメントが多数寄せられました。

今回、分科会で紹介したことにより、参加者が三重の茶文化への理解を深める良い機会となりました。

（記　古川　敬）

懇親会

大会1日目　8月17日（土）19:30 ～　場所：神宮会館　ラウンジ

司会：石川　謙二

司会の、石川謙二（第18回「東南アジア青年の船」事業参加）の開会宣言で始まった懇談会では、三重県IYEOの廣田知加子会長が歓迎のあいさつをしました。続いて、会場の約250名の参加者が一斉に立って、東海ブロックの河村健太郎幹事が乾杯の音頭をとりました。

今回は、直前に行った分科会ごとでの着席方式での懇談会でした。料理は、伊勢エビの姿造り、サザエの壺焼き、とこぶし、あわびなど三重県を代表する食材が懇談会のテーブルに並びました。神宮会館の支配人と料理長に感謝しながら一同、海の食材に舌づつみを打ちました。

会場では、あらかじめ名札の裏に書いていた「20年前の思い出」を交換しながら、初めて会う人ともすぐに打ち解けるようになり、さすがIYEOのコミュニケーション力だと感心させられました。そして、宴もたけなわのところに、伊勢の伝統芸能の木遣りを紹介しました。木遣りとは、大木や石を大勢で引いて行くときに歌う歌です。家や神社を建てるため柱となる木を切り出して引いてくるとき、音頭取りが材木に上って歌った歌が、言葉どおり木遣りでありますが，祝儀歌としても民謡の中に定着して今日に及んでいます。建築儀礼などに歌われ、江戸木遣りなどのように美声の鳶（とび）職に伝承され、棟上げやさらに祭礼の練歌（ねりうた）に転用して使われています。《伊勢音頭》なども、伊勢神宮の20年ごとの遷宮に切り出した材木を運ぶときの木遣り唄に端を発しており、今も全国に分布する《伊勢音頭》及びその系譜の歌のもつはやしことば〈ヤートコセーノヨーイヤナ〉は木遣りの際のはやしことばでありました。

今回は、伊勢にたくさんある奉献団のうち浦口町奉献団の木遣り部の方に来ていただきました。代表の藤原一昭さん以下21名の1団が入場しました。鉢巻き、腹掛け、ももひき、はっぴ、すべて白づくめの衣装は、伊勢神宮に神木やお白石を運び込む時の正装です。総勢21名の木遣り唄はマイクなしでもその甲高い声が会場に響きました。

木遣り唄の後、全国の物産展が開催されました。今回は約300点の物産により151,000円の浄財が集まりました。この浄財は、IYEO組織の基盤作りのための寄付と東日本大震災復興支援金としてIYEO本部に送られることになりました。皆様に感謝いたします。

その後、来年の全国大会開催地である北海道IYEOの小田玲実会長率いる5名が来年への抱負を語りました。

木遣り

三重IYEO会長　廣田　知加子

表彰式

大会2日目　8月18（日）9:00 ～9:45　　神宮会館　大講堂

IYEO表彰は、平成16年2月29日に制定された日本青年国際交流機構規約第20条の規定及びIYEO表彰規定に基づいて行われています。

都道府県青年国際交流機構の会員又はIYEOに長年にわたり継続して協力してくださった方、もしくは団体で、以下の活動項目に当てはまり模範となる活動及び行為をされてきた方が表彰者として選ばれています。

① 地域の国際化及び活性化に資する活動
② 国際交流及び国際協力に資する活動
③ 青少年及び次世代の育成に資する活動
④ 日本青年国際交流機構の組織活性化に資する運動
⑤ 幹事会が認めた内容の活動

また、対象となる活動を2年以上継続して行われているか、短期間に大きく貢献したことも外部的評価によって明らかであることを条件としています。

平成25年度被表彰者

	所属	氏名	参加事業他
1	岐阜県	吉田 康雄	第2回東南アジア青年の船（1975） 第13回東南アジア青年の船（1986） ナショナルリーダー 第15回育成交流（ラオス）団長（2008）
2	国際ネットワークしまね	小塚　昭郎	第21回青年海外派遣（短期北米班）（1979） 第17回日中青年親善交流　副団長（1995）

事後活動報告

大会2日目　8月18日（日）9:45 ～10:45　場所：神宮会館　大講堂

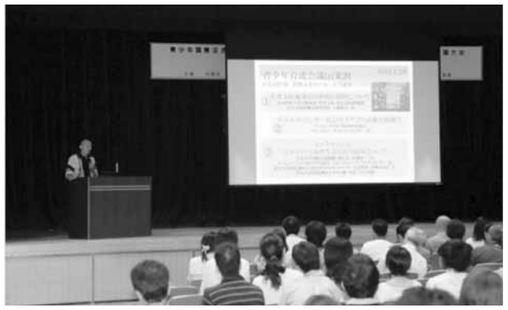
司会：川瀬　明日香

発表者1　土井　敦　鹿児島県青年国際交流機構会長
参加事業：「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」

鹿児島県で実施した介護・地域リハビリテーション研修会の報告が行われました。この研修会の目的は、介護のマイナスイメージを打開し、明るいイメージを発信していく場を提供していくことです。昨年沖縄で行われた全国大会で吉本さん（福井県IYEO会長）と出会い、介護に対して同じ想いを抱いていることを知り、今回の研修会の開催に至ったとのことです。基調講演やシンポジウムを行い、参加者のアンケートでは大変良い、良いの評価が100％で大変好評だったようです。今後、研修会の継続の有効性を検討していくとのことで、鹿児島県IYEOにおいても、一つ一つ活動の目的を考えながら活動に取り組むとのことです。

発表者2　相田　隆行　山形県青年国際交流機構副会長
参加事業：「日本・中国青年親善交流」事業

「青年社会活動コアリーダ育成プログラム」でダニエラ・ゴンザー氏と出会い、活動に感銘を受けた白石さんは、青少年育成会議を開催しました。会議では、山形県での若者支援の現状やダニエラ氏とのトークセッションを行いました。今回の会議開催に当たり、遠方から参加したIYEO会員もいて、IYEOのネットワークの広さを感じることができたようです。



発表者3　菅野　裕子　船と翼の会ふくしま会長
参加事業：「世界青年の船」事業

震災から5か月後、カメルーン子供応援プロジェクトとして、NGO Kentajaというカメルーンの孤児院の支援について報告がありました。Kentajaは、組織の自立支援のため、養豚を育てるプロジェクトを開始しました。遠いカメルーンに関心を持ってもらうことも国際協力と考え、国際交流フェステバルに出店してカメルーンの現状やプロジェクトを知ってもらう活動を行っています。また、福島県の東日本大震災復興支援に対する感謝も述べられました。

発表者4　朝倉　夏歩　愛知県青年国際交流機構会員
参加事業：「東南アジア青年の船」事業

東南アジアに抱いているイメージと実際の違いに気付いてもらいたいとの思いから第1回J-SSEAYPを行いました。「宗教」をテーマに施設訪問やディスカッションを行うことで、参加者からは、その国を詳しく知る良いきっかけとなったという声を多く聞きました。第2回は「ビジネス」をテーマとして、東南アジアでビジネスを円滑に行うポイントを心得ることができるプログラムとし、多くの人に参加してもらいたいとのことでした。

閉会式

大会2日目　8月18日（日）10:45 ～11:30　　神宮会館　大講堂

司会：川上　真由子

1. 開会		
2. 主催あいさつ	内閣府子ども若者・子育て施策支援総合推進室参事官	伊藤　信
	日本青年国際交流機構副会長	佐藤　恵一
	三重県青年国際交流機構会長	廣田　知加子
3. 大会旗引継ぎ	北海道青年国際交流機構会長	小田　玲実
4. 閉式の言葉	第29回全国大会三重大会実行委員長	川村　奈穂

内閣府子ども若者・子育て施策支援総合推進室参事官
伊藤　信

日本青年国際交流機構副会長
佐藤　恵一

三重県青年国際交流機構会長
廣田 知加子

北海道青年国際交流機構会長
小田　玲実

早朝参拝

大会2日目　8月18日（日）　場所：伊勢神宮　内宮

担当：白木　邦貞

■見学地

伊勢神宮　内宮

http://www.isejingu.or.jp

■参加人数　126名

20年に一度の式年遷宮に沸く日中のお伊勢参りも賑やかさがあり、旅情を感じられますが、凛とした空気の中でお参りをする早朝参拝もまた格別でした。

宇治橋を渡ると、そこは日常の喧騒とはかけ離れたまさに神域という呼ぶのに相応しい雰囲気でありました。五十鈴川の清らかさ、内宮の奥に広がる神路山の緑、玉砂利を踏み歩く音など五感を通じて感じられるすべてが非日常を演出していたような気がしました。

また本大会の会場である神宮会館の配慮で、ご案内がいただけたことも伊勢神宮のことをより知っていただく良い機会となりました。伊勢神宮の歴史やそこで行われる祭事、式年遷宮に関することなどを知ることができ、1時間半があっという間に感じられるほど充実したお参りになりました。

（記　白木　邦貞）

地域理解研修
1：伊勢神宮内宮正式参拝

大会2日目　8月18日（日）11:30 ～　場所：伊勢神宮　内宮

担当：三重県IYEO　石川　謙二、廣田　知加子、芳賀　雄佑
愛知県IYEO　高木　善英、岐阜県IYEO　西尾　友里

■見学地
住所　三重県伊勢市宇治館町1
電話番号　0596－24－1111（神宮司庁代表）
http://www.isejingu.or.jp/

■参加人数　72名

■ねらい
通常参拝では入ることのできない御垣内での正式参拝をする。

1 伊勢神宮内宮とは
皇大神宮（こうたいじんぐう）は通称「内宮」とも言い、神路山・島路山を源とする五十鈴川の川上に鎮座しています。御祭神は、天照坐皇大御神（あまてらしますすめおおみかみ）。この御神名はお祭りに際して神前で畏まって称える最高の御名称で、常には皇大御神や天照大御神と申し上げています。

2 正式参拝とは
伊勢神宮では特別参拝と言います。通常御垣内（玉垣の中）には入ることはできませんが、特別に神様にお眼通りが叶うということです。
また、お神楽とは、神様に奉納する舞のことです。多くは、家内安全・五穀豊穣を願って舞います。お祓いが行われ、雅楽が奏でられる中、御神札と神饌が供えられます。次に祝詞（願い事）が御神前に奏上され、続いて典雅な舞（神楽・舞楽）が捧げられます。 そして、再び雅楽が奏でられる中、お供えが下げられて、終了いたします。

実行委員のTシャツの左袖に「御師」というロゴを使用しました。御師とは、平安時代熊野詣の祈祷や宿泊の世話をしたのが始まりです。江戸時代に経済が安定したことにより庶民の間で寺社詣りが信仰と遊興の側面を併せ持つようになっていく中で、伊勢・富士を中心に出雲・津島など多くの神社で御師の制度が発達しました。特に伊勢や富士では全国に檀那（だんな）（常に布施をする人）を持つまでに至りました。例えば、伊勢御師は全国各地に派遣され、現地の伊勢講の世話を行い、彼らが伊勢参りに訪れた際には自己の宿坊で迎え入れて神楽を披露したり、参詣の便宜を図ったりしました。これが、現在のツアーコンダクターの始まりとも言われています。
今回、72名が参加をしました。リード役の私たち三重県IYEOのメンバーも生まれて初めてという貴重な体験することができました。何度訪れても、参詣の後に「すがすがしく」感じるのは、きっと常若である神宮の杜が我々の身を清めていただいているからなのでしょう。

（記　石川　謙二）

2：斉宮いつきのみや歴史会館での平安の和菓子づくり、古代の遊び体験

大会2日目　8月18日（日）11:30 ～　場所：いつきのみや

担当：古川　敬

■見学地
住所　三重県多気郡明和町斎宮3046番地25
電話番号　0596-52-3890
http://www.itukinomiya.jp/

■参加人数　9名

■ねらい
伊勢神宮に仕えた斎王の住まいであった明和町斎宮の「いつきのみや歴史体験館」にて平安時代の和菓子作りや、蹴鞠などの古代の遊びを体験し、古代の歴史への理解を深めます。

■内容
伊勢神宮からバスで40分ほどの場所にあり、古代の雰囲気が漂う史跡が現れます。その真ん中にある寝殿造の建物が「いつきのみや歴史体験館」です。
斎宮は、天皇の代わりに伊勢神宮に仕えた斎王が暮らしていた場所です。歴史体験館では、当時の斎王や王朝人達の生活、遊び等を実際に体験しました。最初の歴史体験は「椿餅（つばいもち）」という平安時代のお菓子作りです。道明寺粉と丁子(クローブ)を混ぜたものに水を加えて蒸し、更に蜂蜜を混ぜて丸めて椿の葉で挟んで完成となります。参加者は楽しそうな様子で、和気あいあいとした時間を過ごしていました。そして参加者の女性に人気だったのは、平安時代の衣装を試着する体験です。当時の衣装を着ることで、斎宮が最も栄えたその時代をイメージしながら、楽しむことができました。

（記　古川　敬）

３:ドラマ高校生レストランのモデル、相可高校「まごの店」見学と昼食

大会2日目　8月18日（日）11:30 ～　場所：猿田彦神社、まごの店

担当：小島　久美子、川村　一之、松本　香奈子

■見学地

猿田彦神社

住所　三重県伊勢市宇治浦田2-1-10

電話番号　0596-22-2554

http://www.sarutahikojinja.or.jp/

まごの店

住所　三重県多気郡多気町大字五桂956

「五桂池ふるさと村」内「高校生レストラン」

電話番号　0598-39-3860（五桂池ふるさと村）

http://jr2uat.net/mago/news.html

■参加人数　32名

■ねらい

ドラマ「高校生レストラン」のモデルにもなった三重県立相可高校調理クラブの運営する「まごの店」を訪れ昼食を取ります。また“おみちびき”の神の猿田彦神社も訪ねます。

■内容

神宮会館近くの猿田彦神社を訪ねてから「まごの店」へと向かいました。「まごの店」は県立相可高校の調理クラブが運営し、営業は高校が休みの週末だけ。10時半の開店前から大勢の人が並び毎回完売する人気店です。17日の同調理クラブ顧問、村林新吾先生の分科会「“高校生レストラン”の人材育成」に続き、この地域理解研修に申し込んだ参加者は約半数。二日間を通してより理解を深められたことでしょう。

店の中はオープンキッチンになっていて、コンロの様子を映すモニターもあり、高校生の皆さんがきびきび働く様子に参加者からは「すごい！」と感嘆の声が上がっていました。料理は特別に考えていただいた「ミニ会席」で、前菜、吸い物、煮物など和食のほかにステーキ、デザートもありました。どれもすばらしい完成度でおいしく、盛り付けも美しいものでした。ホール担当の生徒さんのスムーズな接客にも感心させられました。「このくらいしかおもてなしできないから」とおっしゃる村林先生にはアワビなど伊勢志摩の高級な食材も味わわせていただきました。調理クラブ員は50数名で、週末はだいたい250食ほど用意するとのこと。この日の集合は朝6時だったそうです。

おいしい料理とともに高校生の皆さんにさわやかなパワーを頂いた訪問となりました。

（記　松本　香奈子）

４:二見興玉神社参拝と夫婦岩見学

大会2日目　8月18日（日）11:30 ～　場所：二見興玉神社、夫婦岩

担当：川瀬　明日香

■見学地

住所：三重県伊勢市二見町江５７５

二見興玉神社社務所

電話番号：0596-43 - 2020

http://www.amigo2.ne.jp/~oki-tama/

■参加人数　17名

■ねらい

神宮とも縁が深い二見を訪ねることで三重の新たな魅力を伝えます。

■内容

約30分のバス移動の後、二見興玉神社に到着しました。二見興玉神社は夫婦岩の沖合700mの海中に鎮まる猿田彦大神縁りの霊石と伝えられる「興玉神石（おきたましんせき）」を拝する神社です。縁結び・夫婦円満・交通安全などにご利益があると言われています。また、古くより神宮参拝の前に二見浦の海水で心身を清める禊をする「浜参宮」という習わしがあります。現代ではそれに代わるものとして、二見興玉神社で霊草無垢塩草での祓い清めを受けます。

到着後、まず二見プラザで、てこね寿司と伊勢うどんの会席を食べました。海が望める座敷で伊勢名物をいただくとあって、参加者の会話も弾んだようです。その後、興玉神社を参拝して参道を散策しました。やはり夫婦岩は絶好の写真スポットとなりました。帰りには、志摩スカイラインを通って、朝熊山展望台へと向かいました。展望台から望むリアス式海岸の景色はとても綺麗でした。また、展望台にある足湯に入ってリフレッシュする参加者もいました。

参加者からは、伊勢までは旅行で来ても、なかなか二見や鳥羽まで来る機会がなかったので良い機会となったという感想がありました。

（記　川瀬　明日香）

参加者の感想（抜粋）

・スタッフの誘導が丁寧で助かりました。とても活気ある大会で参加して良かったです。
・20年に一度の行事をとらえて、全国大会を開催していただき、感謝しています。プログラムもバラエティーに富んで、選ぶのに苦しみました。懇親会は立食スタイルの方が良かったです。
・基調講演にあったような古いものと新しいものの共存ということで、まず会場の選択からすばらしかった。
・おもてなしが感じられるとてもいい大会でした。着席での懇親会も落ち着いていて良かったです。
・20年に一度という、神宮のイベントと全国大会を絡めてもらえて、とても良かった。今後も全国のイベントと全国大会がリンクしていけば参加者も増えると思う。（大変だと思いますが）
・大きなタイムテーブルをどこかに貼っていただけると良かった。
・東海ブロック全体で協力し作り上げている感じがしました。細部にわたり準備され動きに迷うことなくスムーズでした。
・東海ブロックの総力をあげた取組に大変感謝しています。実行委員長を始め、グリーンスタッフの活躍にとても嬉しく思いました。
・基調講演がすばらしかったです。分科会では各県や各個人の活動を聞くことができ、実り多いディスカッションになりました。
・初めて全国大会へ参加致しました。IYEOに所属できること、参加できることを改めて誇りに思い、感謝の念を痛感致しました。IYEOで活躍する皆さんに大変刺激を受けました。
・「常若の精神」を三重に来る前に文章を読んで理解したつもりでした。しかし早朝参拝や河合氏の話伊勢神宮の厳かな雰囲気のなかで肌で感じることができ感動しました。